

国立国語研究所学術情報リポジトリ

確認要求表現としての「ダロウネ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): conjecture, seeking confirmation, compound modal form, daroo-ne, (no) dewa-nai-daroo-ne 作成者: 宮崎, 和人, MIYAZAKI, Kazuhito メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002020

確認要求表現としての「ダロウネ」

宮 崎 和 人

(岡山大学)

キーワード

推量, 確認要求, 複合モダリティ表現, ダロウネ, (ノ) デハナイダロウネ

要 旨

本稿では、現代日本語における文末表現の「ダロウ」と「ネ」が共起した文の意味と機能について考察した。

「ダロウネ」には、「推量系」と「確認系」という、モダリティとしての一体性(複合度)や意味・機能のまったく異なる二つのものが存在し、前者は、推量の「ダロウ」と終助辞「ネ」の合成としてその意味・機能が説明できるのに対して、後者は、「当為確認」とも言うべき一種の確認要求表現として機能する複合モダリティ表現であり、「そうあるべき」という当為性の側面を命題として表示し、「そうでないことが見込まれる」という命題不成立の可能性の側面(危惧・懸念)を潜在化させている。さらに、確認系「ダロウネ」は、こうした意味的特性を基に、否定辞への接続を通して、命題不成立の可能性の側面を前面化させることによって、当為確認から「懸念確認」へと、新たな確認要求機能を派生させている。

なお、WH疑問文と共起する「ダロウネ」は、実質的には、話し手の疑念を聞き手に持ち掛けるもの(「ダロウカネ」と見做すべきである。

1. はじめに

現代日本語の確認要求表現の本格的な研究は、「ダロウ」が推量以外に疑問文としての用法を持つことへの注目、及び、それと推量用法との関係についての説明に始まり(奥田(1984), 森山(1989), 田野村(1990: 第5章), 金水(1992), 宮崎(1993)等), それを「(ノ) デハナイカ」や「ネ」などの他の文法的類義表現と比較する(安達(1991), 仁田(1991: 第2章), 鄭(1992), 蓮沼(1995), 宮崎(1996a), 三宅(1996)等)という形で展開してきたと言えるだろう。

(1) これ、君のハンカチ {だろ／じゃないか／だね} ?

しかしながら、これらの確認要求の諸表現に次のような「ダロウネ」を加える議論は、従来ほとんど見当たらない。

(2) この本貸してあげてもいいけど、本当に返してくれるだろうね。

その理由として考えられることは、1) 「ダロウネ」が複合的な形式であるため、「ダロウ」等の単純形式と同じレベルで論じる必要はない、あるいは、「ダロウ」と「ネ」の意味の加算によって説明できる、と暗黙のうちに考えられているのではないかということ、2) そして、

(3) 彼はたぶん来るだろうね。

のように「ダロウネ」に含まれる「ダロウ」が明らかに推量を表している場合も、結局は「ネ」の機能によって聞き手に持ち掛ける意味を生じることから、どのような場合を確認要求の「ダロウネ」として分析の対象とすべきかということが曖昧であり、したがって、確認要求表現としての独自性も見出しにくい、ということがあるのではないかということである。

本稿では、(2)のような用法の「ダロウネ」が、(3)のような推量文にすぎない「ダロウネ」から明瞭に区別できるということを示し、しかも、それは、命題構成のあり方の点で特異な性格を持つ、「当為確認」とでも言うべき確認要求表現として特立すべきものであることを論証したいと思う¹。

2. 従来の研究における「ダロウネ」の取り扱いと問題点

従来のモダリティ研究における「ダロウネ」についての言及としては、まず、森山(1989)がある。森山は、「聞き手情報配慮・非配慮」の観点から、確認要求の「ダロウ」と「ネ」を同じく聞き手情報配慮を表示するものと見て、両者が共起すると、その意味機能が重なり合うことになるため、機能分担する必要から、「ダロウ」は、蓋然性(いわゆる推量)の意味にしかないと述べている。しかし、(2)のような例の「ダロウ」が純然たる推量を表現しているとは考えにくく、森山自身も、森山(1992:77-78)では、「押し付け型の確認」の「ダロウ」と「ネ」は共起しないが、「伺い型の確認」の「ダロウ」と「ネ」は、話し手が聞き手の反応を伺いつつ確認し、同意を期待するという性質のものとして共起でき、「立ち入って確かめる」ようなニュアンスになると述べている²。

(4) 本当に、鍵を締めてきただろうね。(伺い型の確認)

(5) *ほら、彼が来ただろうね。(押し付け型の確認)

しかしながら、森山の指摘が、伺い型の確認の「ダロウ」文にさらに「ネ」を後接させることが可能であるということだとするなら、これは事実と反している。例えば、旧友らしき人物と偶然出会って、

(6) おい、田中 {だろう/*だろうね} ? いやあ、久しぶり。

のように言うのは、典型的な伺い型の確認を表す「ダロウ」の例であるが、これにそのまま「ネ」を付加することは不可能である。伺い型の確認の「ダロウ」と「ネ」が共起するとする森山の指摘は、「ダロウ」と「ネ」が組み合わせられて確認の意味で使われている場合には、それ全体が伺い型の確認の意味になる(問い掛け性を持つ)、というように理解すべきだろう。

さて、(6)で「ダロウネ」が使えない理由を意味の面から考えてみよう。ここで「ダロウネ」が使えないのは、文脈不適合によるのではないだろうか。この例で「ダロウネ」を使うと、「相手が田中でなければ不都合である」という読みが出てくるように直感される。「偶然出会った人物が田中でなければならぬ」ということは現実的にはありえないので、「ダロウネ」が使えないということになるのではないだろうか。実際、既に挙げた(2)や(4)には、「そうあるべきだ」「そうでなくては困る」といった意味合い、例えば、(2)では、「本を返してくれるべきだ、返してくれなければ困る」というような意味合いが明瞭に感じられる。森山(1992)の言う、「立ち入って

確かめる」ようなニュアンスは、このように明示化されるのではないだろうか。

こうした一種の価値判断的な意味・ニュアンスは、個別的文脈に依存するものではなく、確認要求表現として機能する「ダロウネ」自体に焼きつけられた性格であるというのが、本稿の主張の第一歩である。こうした指摘は、ごく断片的にはあるが、既に、宮崎(1993)で行ったことがあり、その後、これに対する反論が中野(1996: 497-498)によって出されている³。すなわち、確認要求の「ダロウネ」には、上述のような価値判断的な含意が感じ取れない例が存するというのである。

(7) 「こんな具合じゃ、噂の調査も進んでいないんだろうね」(中野(1996: 488))

この文全体としては、確かに、「ネ」によって聞き手に持ち掛け、軽く念を押すような意味になっていると言ってよいかもしれない。しかし、問題は、この例の「ダロウ」があくまでも推量の意味を保持しているということである。したがって、

(7') 「こんな具合じゃ、きっと噂の調査も進んでいないんだろうね」

のように、「キット」のような確信度表示副詞と共起することが可能である。これは、先に見た、(2)や(4)のような、確認要求であることが明らかな(そして、価値判断的な含意を持つ)「ダロウネ」が確信度表示副詞と共起できない⁴ことと、対照的である。

(2') *この本貸してあげてもいいけど、たぶん本当に返してくれるだろうね。

(4') *本当に、きっと鍵を締めてきただろうね。

つまり、(7)は、(3)と同様、「ネ」の付いた推量文と見做せるわけだが、中野(1996)では、これを区別せずに確認要求文として扱っているようである。

そこで、確認要求の「ダロウネ」に対して価値判断の含意に関する上述のような性格づけを行うためには、これが、推量の「ダロウ」に「ネ」が付くことによって形成された「ダロウネ」から明確に区別されうるという前提に立つ必要がある。実際、「ダロウネ」を二分する見解は、既に、井上(1990)で示されており、井上は、推量の「ダロウ」+「ネ」を「同意要求のダロウネ」、確認要求の「ダロウネ」を「疑念確認のダロウネ」と呼んで区別し、後者については、「複合モダリティ表現」を構成し、「話し手がある命題に疑念を抱き、その真偽を確認する」ものと捉えている。井上が両者を区別する根拠となる現象として取り上げているのは、

(8) A: この調子だと、おそらく完成までにはそう時間はかからないだろうね。(ねえ。)

B: そうだろうね。

(9) A: みなさん、忘れ物はないでしょうね。(?? ねえ。)

B: ?? そうですね。

のように、念押し表現「ネエ。」の後続、及び、「ソウダロウネ」での応答が可能か否かということである(井上(1990: 31))。すなわち、「ネエ。」の後続、「ソウダロウネ」での応答が可能な(8) Aは同意要求の「ダロウネ」で、不可能な(9) Aは疑念確認の「ダロウネ」であるとする。

本稿は、上記のように、二つの「ダロウネ」が、推量の意味を保持しているか否か、複合モダリティ表現を構成しているか否か、という点で明瞭に区別されると主張する点で、井上(1990)と同じ立場を取る。ただし、推量の「ダロウ」+「ネ」には、(8) Bのように、同意を要求しないもの

(むしろ、相手の発話に対して同意を表明したり応答したりする用法) も多々見られるので、これを単に「推量系」の「ダロウネ」と呼ぶことにする。また、「ソウダロウネ」での応答の可能性のテストについても、

(10) A: 例の噂については、たぶん君ももう知ってるだろうね。

B: *そうだろうね。

のように、聞き手情報の確認の場合には適用できない(同意要求(推量系)であっても、「ソウダロウネ」で応答できない)ので、より直接的なテストである、確信度表示副詞(「キット」「タブン」「オソラク」等)や推量副詞(「サゾ」「サゾカシ」等)との共起を優先的に適用する。この他、推量系の「ダロウネ」としか共起しない要素としては、「残念だが」等の評価に関わる前置きの表現がある。

他方、井上の「疑念確認のダロウネ」を、本稿では、「確認系」の「ダロウネ」と呼ぶことにする。この「ダロウネ」を見分けるテストとしては、推量系の場合とは逆に、確信度表示副詞や推量副詞と共起しないということと十分だが、「マサカ」「ヨモヤ」等の「想定外」を表す副詞や「本当ニ」「タシカニ」等の「発話の信憑性」を問題にする副詞との共起テスト、「念のために聞くけど(お伺いしますが)」といった類の前置きの表現との共起テストを補助的に用いることもできるだろう⁵。以下に挙げる例文のペアは、aが推量系、bが確認系である。

(11) a. *残念だが、まさか、彼は来ないだろうね。

b. まさか、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

(12) a. *残念だが、本当に、彼は来ないだろうね。

b. 本当に、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

(13) a. *念のために聞くけど、たぶん、彼は来ないだろうね。

b. 念のために聞くけど、本当に、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

本稿と井上(1990)は、「ダロウネ」を大きく二つに区分する点で共通するものの、WH疑問文と共起する「ダロウネ」について、これを第三の「ダロウネ」として位置づける点は、本稿独自の観点である。これについては、後程、改めて論じることにする。また、これも後述することであるが、確認系「ダロウネ」が否定辞をモダリティ要素に取り込むことによって「懸念確認」の用法を派生させるという把握を行う点でも、本稿は、井上と同じ立場を取るが、「ダロウネ」自体の確認要求表現としての意味的特性に踏み込むことによって、この現象のより本質的な部分を探ってみたいと思う。

3. 「ダロウネ」と問い掛け性

確認系「ダロウネ」の確認要求表現としての特質について検討を行う前に、この節では、推量系「ダロウネ」が、確認系「ダロウネ」と同様に、聞き手に問い掛ける文として機能することがあるということに目を向け、両者における問い掛け性の質の違いを明らかにしておきたい。

本稿では、質問文一般が有する、聞き手から情報を引き出すことによって、情報の不確定性を解消しようとする機能を「情報要求性」と呼ぶことにする。ある文が当該文脈で情報要求性を有しているか否かを判定する最も簡単な方法は、応答文の形式に注目することである。言うまでも

ないことだが、情報要求文に対する最も自然な応答の仕方は、情報提供の文形式を用いることでありと考えられるからである。ここでは、終助辞の付かない断定文で応答できるということを、情報要求文であることの必要条件と考える。

終助辞「ネ」を取る文には、情報要求性を帯びているものとそうでないものがある。次に示すように、情報要求性を持つ(14)は、「ネ」のない断定文で自然に応答できるが、(15)のような用法では、「ネ」のない断定文で応答できないことから、聞き手に何らかのコメントは求めているものの、ここで言う情報要求性はないと見られる。

(14) A：歓迎会には出てくださいますね？

B：ええ、{出ます／*出ますね}。

(15) A：今日はいい天気ですね。

B：ええ、{*そうです／そうですね}。

では、「ダロウネ」は、情報要求性に関して、どのような特徴を持つのだろうか。まず、推量系の「ダロウネ」については、「ネ」の場合と同様に、(16)のように、「ネ」のない断定文で応答するのが自然な場合と、(17)のように、「ネ」も「ダロウ」も伴わない断定形では自然な応答として成立しない場合とがある⁶。

(16) A：(旅行帰りの人に)初めての海外旅行はさぞ楽しかったでしょうね。

B：ええ、とても {楽しかったです／*楽しかったでしょう／*楽しかったでしょうね}。

(17) A：今年の夏はたぶん暑くなるでしょうね。

B：ええ、{*暑くなります／暑くなるでしょう／暑くなるでしょうね}。

このように、「ネ」の文も、推量系「ダロウネ」の文も、聞き手のみが真偽を確定できる状況((14)、(16))では情報要求文として働くが、話し手と聞き手との間に特に情報の格差がない場合((15)、(17))には情報要求文としては働かない。つまり、「ネ」や推量系「ダロウネ」は、無条件で情報要求文として働くわけではない。

また、質問に対する応答に用いることができることでも、「ネ」の文と推量系「ダロウネ」の文には、共通性が認められる。この場合、話し手は、尋ねる側でなく、答える側であるから、情報要求性はもちろんのこと、何らかの反応を要求する性格自体がない。

(18) A：ゴルフとテニスとでは、どちらがお好きですか？

B：どちらかと言うとテニスの方が好きですね。

(19) A：全仏決勝はどちらが勝つと思いますか？

B：たぶんグラフでしょうね。

「ネ」や推量系「ダロウネ」がこうした用法を持つことも、情報要求性がこれらに固有の性質ではないことを示している。

以上のように、推量系「ダロウネ」の情報要求性の揺れは、「ネ」における情報要求性の揺れがそのまま反映したものと見られ、このことも、推量系「ダロウネ」が推量の「ダロウ」に単に「ネ」を付加したものにすぎないということを示唆していると言えそうだが、厳密には、「ダロウ」の有無に起因して、両者の情報要求性には本質的な違いがあるということにも注意する必要がある。

そのことを端的に示すのは、次のような現象である。よく知られているように、確信度表示副詞等の判断の様相を表示する要素は、典型的な質問文とは共起しない。

(20) A : *きっとお疲れですか？

B : ええ、少し疲れました。

この点に関して、ともに情報要求性を有しているように見える、「ネ」と推量系「ダロウネ」は、違った振る舞いを見せる。

(21) A : ?? きっとお疲れですね？

B : ええ、少し疲れました。

(22) A : きっとお疲れでしょうね。

B : ええ、少し疲れました。

情報要求性を帯びた「ネ」の文は、質問文と同様、確信度表示副詞と共起せず、結局は、判断未成立の文であると見られるのに対して、(22)のように、情報要求性を示しながら、確信度表示副詞と共起することのできる推量系「ダロウネ」の文は、話し手の推量判断が成立している文と考えられるのである。つまり、(21)のような「ネ」の文は、話し手自身は判断を放棄しているという点で、質問文と同質の情報要求性を帯びていると言えるのに対し、推量系「ダロウネ」の文は、文脈内で情報要求性があるように見えることがあっても、それは、話し手の下した推量判断が聞き手の知識や経験に関係が深い場合には、結果的にその当否についてコメントするように聞き手を誘導することになるという、純粹に語用論的現象であると見做せる。

以上に見たように、推量系「ダロウネ」の情報要求性が語用論的なレベルで発動されるのに対して、確認系「ダロウネ」の情報要求性は、それ自体の文法的な性格であると見られる。これは、この「ダロウネ」が確認要求表現の一種であることから、当然のこととも言える。(19)のような、推量系「ダロウネ」に見られる応答用法が確認系「ダロウネ」にはないということが、そのことを端的に示している。

(23) A : 明日の会議に出席されるのはどなたですか？

B : *まさか、山田さんではないでしょうね。(cf. たぶん、山田さんではないでしょうね。)

また、確認系「ダロウネ」の文に対する応答は、基本的には、(24)のように、「ネ」のない断定形でなければならない。

(24) A : 例の件、ちゃんと彼に伝えてくれたでしょうね。

B : ええ、{伝えました/*伝えたでしょう/*伝えたでしょうね}。

この点も、確認系「ダロウネ」が情報要求性を有することを示している。もっとも、確認系「ダロウネ」に次のような用法があることもまた事実である。

(25) A : まさか、明日は雨は降らないでしょうね。

B : ええ、{*降りません／降らないでしょう／降らないでしょうね}。

この例では、(17)のような、情報要求性のない推量系「ダロウネ」と同様に、「ネ」のない断定文では、まともに応答できない。こうした用法は、確認要求としては、典型的ではないと言わざるをえないだろう。しかし、この例においても、聞き手に判断を求めていることは明らかであり、

必ずしも相手から同意が返ってくることを想定していない。例えば、「いや、降るかもしれませんよ。」といった答えが返ってきたとしても、意外な感じはしない。その点では、単に同意を求めるだけの(15)や(17)と異なっている。

確認系「ダロウネ」における情報要求性は、(25)のような、判断の要求といった用法を生じさせる点で、

(26) この映画はもうご覧になりましたか？

のような典型的な質問文における情報要求性に比べれば、より語用論的な現象であると言えるかもしれないが⁷、情報を要求する機能と判断を要求する機能を合わせて「問い掛け性」と呼ぶならば、推量系「ダロウネ」それ自体は問い掛け性を持たず、確認系「ダロウネ」はそれ自体が問い掛け性を持つ、というようにまとめることができるだろう。

以上、本節では、問い掛け性をめぐって、推量系「ダロウネ」と確認系「ダロウネ」の相違を述べた。次節では、本稿の中心的課題である、確認系「ダロウネ」を確認要求表現として定位させる議論を行う。

4. 確認要求表現としての「ダロウネ」

4.1. 確認系「ダロウネ」の使用条件と用法

確認系の「ダロウネ」は、一種の確認要求表現であると見ることができる。まず、その使用条件を、その構成要素である「ダロウ」「ネ」が単独で使われた場合と比較しながら考えてみよう。

次の三つの文末表現は、それぞれに確認要求として用いられる状況が異なる。

(27) 君ハ大学生 {ダロウ／ダネ／ダロウネ}

例えば、

(28) 君は大学生 {だろう？／??だね。／*だろうね。} だったら、もっと勉強しなきゃ。

のように、聞き手の自覚のあり方を問題にする時には「ダロウ」が最も自然であり、

(29) おめでとう。この春からいよいよ君は大学生 {*だろう？／だね。／*だろうね。}

のように、既知の情報を聞き手とともに再認識するような場合は「ネ」しか使えないといったことがある。

では、問題の「ダロウネ」が使われる状況はと言うと、典型的には、

(30) 学生証持ってないって？ 本当に君は大学生 {*だろう？／??だね？／だろうね。} 学生証がないと学割はきかないよ。

のように、「命題が成立しなければならぬ、そうでなければ何らかの不都合が生じる、にもかかわらず、現実には、成立しない可能性が少なからず存する」といった状況である。一方、(28)、(29)では、命題が成立しない可能性は見込まれておらず、また、成立しなければ不都合だということもない。「成立すべき命題が現実には成立しない可能性が見込まれる」という、価値判断と真偽判断のギャップが生じている状況において、確認系「ダロウネ」が使用可能になると考えられる⁸。

確認系「ダロウネ」がこうした使用条件の下に使われることを、いくつかの実例を通じて確認しておこう。

(31) 「事務室が何をいったか知らないが、そんな仕事は、むだだろう？ 今夜、死体焼却場へ運ぶという事は前から定まっていたんだ」

「でも、手ちがいは向うなんだから、報酬はきちんと、はらってくれるでしょうね」

「まるで必要のない仕事をしてかい？」と助教授は冷淡にいった。

「僕は知らないよ。管理人に聞いてみることだな」(死者)

(32) 「これは、太郎に改めて聞きたいんだけど、太郎は本当に、名古屋で、勉強する気があるんだらうね」

太郎は七面鳥になったような気分だった。赤くなり、青くなりして、怒りたかった。

「本当に勉強したいんなら、この間から、考えていたことなんだけど、太郎には、住む所に、法外な贅沢をさせてやってもいいと思っているの」(太郎)

(33) 「きみ、ばあさんに言わなかっただらうね」

と修一郎はズボンのポケットに両手をつつこんだまま厚子の前に歩いてきた。厚子は、彼から押しつけられた一万円札を考え、なにかいやな予感があった。(冬の)

(31) は、「報酬は当然払われるべきだ」が、「払われない」可能性があるという状況、(32) は、「太郎に名古屋で勉強する気がなければならぬ」が、「その気がない」可能性があるという状況、(33) は、「ばあさんに言われては困る」が、「言われた」可能性があるという状況で、聞き手に確認を行っているものである。

さて、これまでに挙げた確認系「ダロウネ」の例は、いずれも、話し手が命題として示された事柄自体の成立・実現について当為性を認めているものであった。例えば、(33) では、「ばあさんに言わなかった」という事柄そのものの成立について「そうあるべき」という認定を行っていると言える。これに対して、

(34) A：彼女は君のこと嫌いだって言ってたよ。

B：本当に彼女はそう言ったんだらうね。

のような例では、言うまでもなく、「彼女がBのことを嫌いだと言った」という行為の遂行について、「そうすべき」と考えているわけではない。むしろ、その逆であろう。こうした用法は、相手の主張が俄かに信じられないため、その信憑性について再確認を行う、といったものであるが、確認系「ダロウネ」がこうした用法を持つのはなぜだろうか。

こうした用法でも、実は、『彼女がBのことを嫌いだと言った』という事柄が成立しなければならないという当為性の認定は行われているという解釈が成り立つ。もし、「彼女はBのことを嫌いだと言っていない」とすると、Bは嘘をついている（あるいは、誤った情報を伝えている）ことになり、これはこれで明らかに不都合なことであるからである。ここでは、「情報伝達においては真実を伝えるべきであり、Aの主張が真実を伝えているならば、『彼女がBのことを嫌いだと言った』ということではなければならない」というような意味で、当為性の認定が行われていると考えられる。なお、こうした用法では、必ず、「ノダロウネ」となるが、これは、「彼女がそう言ったというのは本当だらうね。」のように言い換えられることから分かるように、確認の焦点が「本当かどうか」というところにあるからである⁹。

このような用法を視野に収めた上で、確認系「ダロウネ」の確認要求表現としての特徴として、「当為性」という意味特徴が重要であることは、これまでの議論からほぼ明らかになったのではないと思う。そこで、本稿では、このような確認系「ダロウネ」の基本的機能を「当為確認」と仮に呼んでおきたい。

4.2. 当為確認における命題構成

次の例は、教師が宿題をやっていない可能性がある学生に向かって確認するという文脈におけるものである。

(35) 机の上にノートが出てないけど、君、宿題やってる {*んじゃないか?/*だろう。/?
ね?/だろうね。}

(36) 机の上にノートが出てないってことは、君、宿題やってない {んじゃないか?/だろ
う。/ね?/*だろうね。}

このように、「ダロウネ」だけが他の確認要求表現と逆の文法性を示す理由を、命題が文の意味の
どういう側面を表示しているかという点から考えてみる。

既に述べたように、確認系「ダロウネ」の文の意味には、「そうあるべき」という側面（当為性
の側面）と、「そうでないかもしれない」という側面（命題不成立の可能性の側面）の二面性がある。
「ダロウネ」の場合、実際に命題を構成するのは前者の側面であり、後者の側面は話し手の疑念（危
惧・懸念）として潜在している。他方、価値判断を含まない他の確認要求表現は、「そう推測され
る」という側面（命題成立の可能性の側面）しかなく、それがそのまま命題を構成していると見ら
れる。命題成立の可能性を想定する副詞である「モシカシテ」が、「ダロウネ」以外と共起するこ
とも、それを裏づけている。

(35') *机の上にノートが出てないけど、君、もしかして、宿題やってるだろうね。

(36') 机の上にノートが出てないってことは、君、もしかして、宿題やってない {んじやな
いか?/だろう。/ね?}

このような命題構成のあり方の違いが、(35)、(36)に見られるような文法性のコントラストに反
映していると考えられる。

このような、確認系「ダロウネ」の文における意味と命題構成の関係のあり方こそが、これを
確認要求表現の一タイプとして特立することの意味論的な根拠となる。そして、「ダロウネ」が、
すぐ後に述べる、「懸念確認」といった新たな機能を展開させる動機も、このことの中に潜んでい
ると言える。

4.3. 当為確認から懸念確認へ

4.3.1. 「ダロウネ」と否定

先に見た、(35')は、述語部分を次のように言い換えると、「聞き手は宿題をやっていないならば
ならないが、やっていない可能性が見込まれる」という意味を保持したまま、「モシカシテ」が共
起可能になる。

(35”) 机の上にノートが出てないけど、君、もしかして、宿題やってないんじゃないだろうね。
この現象は、否定辞が絡むことによって、「ダロウネ」の文が、他の確認要求表現と同様に命題成立の可能性を問題にする文へと構造を変化させていることを示唆している。

さて、否定命題を取る確認系「ダロウネ」が、「本当ニ」「マサカ」という、異なる副詞と共に起した場合の意味の違いを観察してみよう。

(37) 本当に、私の日記、読まなかったでしょうね。

(38) まさか、私の日記、読まなかったでしょうね。

この二文は、命題「聞き手が日記を読まなかった」が成立しなければ困るという価値判断と、「聞き手が日記を読んだ可能性がある」という現状認識に基づいて確認を行っているということでは、これまでの場合と同様である。違いは、これらの文の命題が否定命題であるということにすぎず、そのことは「ダロウネ」の意味自体に影響を与えない。そのことを確認した上で、共起副詞の違いに応じて、両者の間に次のようなニュアンスの違いが生じていることを指摘したい。

まず、(37) は、「本当ニ」の共起によって、「日記を読まなかった」という聞き手の主張に偽りが無いということについて念を押しているような意味合いが感じられる。つまり、命題が現実に対応していることを確認していると見られる。他方、(38) は、「マサカ」の共起によって、「聞き手が日記を読んだ」という、あってはならない事態が生じていないということについて念を押していると読めるのではないだろうか。論理的には同じ結果になるのだが、直接に命題の成立（「読まなかった」こと）を確認するか、それとも、命題が不成立でないこと（「読む」ということがなかったこと）を確認するか、という違いが、両者の間にあると考えられる。

否定辞に続く「ダロウネ」の用例には、実際に「マサカ」を伴っているものが少なくなく¹⁰、伴っていないとしても、ほとんどすべてが共起させることが可能である。

(39) 「では旦那さま、美濃をお捨てなさい」

と、お万阿はいった。

「捨てて、京にもどっていただきます。まさか、將軍になれなかったからこのまま京へかえらず美濃に居すわる、などとおっしゃらないでしょうね」

「ふむ。……」（国盗）

(40) 「すると、奴等は、まだこのあたりに潜んでいるのでしょうか。まさか民家に押し入ることはしないでしょうね」

副院長が腹だたしげにさげんだ。（冬の）

逆に、否定辞がない文とは、「マサカ」は共起できない。(41) と (42) は、知的意味はほぼ同じであるにもかかわらず、否定辞のない後者には、「マサカ」が使えないのである。

(41) {本当に／まさか}、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

(42) {本当に／*まさか}、僕の嫌いなあいつは欠席するだろうね。

こうした現象は、「マサカ」が否定呼応副詞（陳述副詞）であるということで片づけられるわけではない。なぜならば、同じ現象は、否定呼応副詞ではない「モシカシテ」にも認められるからである。

(43) もしかして、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

(44) *もしかして、僕の嫌いなあいつは欠席するだろうね。

つまり、これは、副詞の性格だけで説明できる問題ではなく、あくまでも、確認系「ダロウネ」の文の意味的特性との相関として説明する必要がある。「マサカ」は、「ダロウネ」の文の意味に対して、「モシカシテ」と同じ側面で働き、「本当ニ」とは違った側面で働くということになる。

「本当ニ」が否定辞の有無に関係なく共起するのは、肯・否を含んだ命題全体に対して働くからである。また、既に述べたように、確認系「ダロウネ」の文の命題は、当為性の側面で構成されているから、「本当ニ」は、「そうあるべき事柄が現にそうになっているか」ということを確認する際に確認系「ダロウネ」の文と共起することになる。一方、「モシカシテ」は、そもそも、確認系「ダロウネ」の文とは共起できないはずである（実際、(44)のように、共起できない）。なぜなら、この副詞は命題成立の可能性を想定する働きをするが、これも既に述べたように、確認系「ダロウネ」の文においては、命題成立の可能性ではなく命題不成立の可能性が想定され、しかもそれは含意として潜在化しているにすぎないからである。

では、なぜ、(43)のように、否定辞が含まれることによって、「モシカシテ」の共起が可能になるのだろうか。それは、この文が否定辞を含むことによって、それに前接する部分命題 P_1 を析出し、

(45) [[[僕ノ嫌イナアイツハ来] P_1 ナイ] P_2 ダロウネ] M

のように構造化されうるからだと考えられる。すなわち、ここでは、肯定文においては潜在化していた命題不成立の可能性の側面が部分命題 P_1 として顕在化していることになり、これによって、「モシカシテ」は、この P_1 に対してその成立の可能性を想定する働きをすることができるようになるのである。同じく否定辞がなければ共起できない「マサカ」も、やはり、 P_1 に対して働く副詞であると見られる。両者の違いは、「モシカシテ」が P_1 の成立の可能性を積極的に想定するのに対して、「マサカ」は、逆に、 P_1 の成立の可能性が本来は想定しがたいものであると捉えるということにあると思われる。

以上のように、「本当ニ」「マサカ」「モシカシテ」といった副詞の共起現象は、確認系「ダロウネ」の文が「当為性」及び「命題不成立の可能性」といった二側面の意味を持つことの反映として適切に説明できることになる。

さて、もう一つ、確認系「ダロウネ」と否定の絡みで生じる興味深い現象を指摘しておきたい。「マサカ」と「ダロウネ」が共起した確認要求に対する否定の応答には、肯定応答詞と否定応答詞のいずれもが使用可能である¹¹。

(46) A：まさか、僕の嫌いなあいつは来ないだろうね。

B：{うん／いや}、来ないよ。

このような現象が生じることも、(45)のような構造化を考えることでうまく説明できる。肯定応答詞を用いた場合は全体命題 P_2 を基準として、否定応答詞を用いた場合は部分命題 P_1 を基準として、それぞれ応答しているのである。

こうした、否定辞の介在による部分命題 P_1 の切り出しといった現象を媒介として、当為確認は、

次に述べる「懸念確認」へと連続していく。

4.3.2. 「(ノ)デハナイダロウネ」

次のような例になると、 P_1 相当部分が「コト」に括られることによって、「ナイ」から独立し、 P_1 と P_2 は、統語的にも分離可能になる。

- (47) 「それであたくしが良くなりますものかどうか、失礼ですけど大先生は、たしかに五種か六種のお薬を……まあいいですわ、飲んでみればわかります。あたくしが敏感なことは診察をされた先生にはわかって貰えているでしょうが、まさかそのお薬を飲んであたくしがそのままお陀仏するようなことはないでしょうねえ？（後略）」（楡家）

このようになると、 P_1 が文の意味的な構成要素として完全に自立するようになり、「～ことはない」という全体命題についてそうであることを確認する文から、危惧・懸念される事態として「そのお薬を飲んであたくしがそのままお陀仏するようなこと」を提示しつつそうでないことを確認する文への移行の可能性が生じる。次のような表現（「シハシナイ」「シタリ（ハ）シナイ」）についても、同様のことが言えるだろう。

- (48) 本当のことを言っても、怒りはしないだろうね。

- (49) 君は、人を殴ったり（は）しないだろうね。

こうした表現においては、「ナイ」はまだ否定命題を構成していると言えるが、次のような「ノデハナイダロウネ」といった表現は、一つのモダリティ表現として完全に複合していると考えられる。

- (50) 母の方は気が気でない様子。

「お前、何かやらかしたんじゃないんだろうね？」

「よしてよ。私が信じられないの？」（女社）

- (51) 「まさか、加藤さん、このぐらいの吹雪をおそれているのではないでしょうね」

「おそれているよ。吹雪を衝いて槍へ登るなどということはあまり讃められたことではない」（孤高）

つまり、「ノデハナイダロウネ」の文では、「ナイ」がモダリティの要素になり、次のように構造化されていると考えられる¹²。

- (52) [[]_P ノデハナイダロウネ] _M

その根拠として、否定の応答に否定応答詞のみが用いられるという事実を指摘できる。

- (53) A：お前、何かやらかしたんじゃないだろうね。

B：{*うん／いや}、何もやってないよ。

ここでは、命題は、もはや、当為性の事態ではなく、逆に、危惧・懸念される事態となる。こうした構造変化によって、肯定文の当為確認では、危惧・懸念の側面が潜在化しているため不可能であった「マサカ」との共起が、「ノデハナイダロウネ」では命題の肯・否に関わらず可能になる。

- (54) a. まさか、嘘ついてないだろうね。 （当為確認）

b. {*まさか／本当に}, 宿題やってるだろうね。(")

(55) a. まさか, 嘘ついてるんじゃないだろうね。(懸念確認)

b. まさか, 宿題やってないんじゃないだろうね。(")

「ノデハナイダロウネ」は, 命題を危惧・懸念される事態として提示しつつ, それが現実に対応しないことを確認する, 複合モダリティ表現である。ここでは, その機能を「懸念確認」と呼ぶことにする。これはちょうど, 命題を当為性を持つ事態として提示しつつ, それが現実に対応していることを確認する当為確認と裏表の関係にあると言えよう。(54) と (55) の間に言い換え関係が成り立つのはそのためである。

以上のように, 動詞述語文では, 「ノデハナイダロウネ」を懸念確認の専用形式と見ることができる¹³。これは, 基本的には, 名詞述語文についても同様である。

(56) a. まさか, 彼は詐欺師じゃないだろうね。(当為確認)

b. {*まさか／本当に}, 彼はまともな人間だろうね。(")

(57) a. まさか, 彼は詐欺師なんじゃないだろうね。(懸念確認)

b. まさか, 彼はまともな人間じゃないんじゃないだろうね。(")

ただし, 名詞述語文の場合, 否定命題が「～デハナイ」という形を取るため, 否定命題を取る当為確認(「デハナイダロウネ」)と懸念確認(「ナノデハナイダロウネ」)の形式的な区別は, 動詞述語文の場合に比べて曖昧なのではないかと思われる。これは, 動詞述語文では, (58) のように, 「ダロウネ」の直前に「ノ」が挿入できるかどうかで, 当為確認と懸念確認が区別できるのに対して¹⁴, 名詞述語文では, (59) のように, その区別が消失している, ということから裏づけられる。

(58) a. まさか, 嘘ついてない {φ/*ん} だろうね。(当為確認)

b. まさか, 嘘ついてるんじゃない {φ/ん} だろうね。(懸念確認)

(59) a. まさか, 彼は詐欺師じゃない {φ/ん} だろうね。(当為確認)

b. まさか, 彼は詐欺師なんじゃない {φ/ん} だろうね。(懸念確認)

このことから, 名詞述語文では, 「デハナイダロウネ」という形態が, 当為確認と懸念確認の区別なく用いられている可能性が考えられる。

なお, 実際の用例として, 「ダロウネ」の直前に「ノ」が入るものは, 動詞述語文では, (50) のようなものが見つかるが, 名詞述語文は, いずれも「ノ」の入らない例ばかりである。

(60) 「ルーブル, あたしもこれを買おうと思った時代があったわ。婆や, あの瀬長さんよ, あの特別の神経衰弱よ。あの人がこのルーブル紙幣を持っていたわ。あの人が, 今どこにどうしていることや。まさかこの犯人が瀬長じゃあないでしょうね。あんな気の弱い人に犯罪は無理ね。あの人がもう葉ばかり買いこんで……(後略)」(楡家)

(61) 「山村さんから手紙をだしていませんか」

「それはかまわないが, しかし, 返事がこないというのは, やはりなにか理由があるのかな」

「病気じゃないでしょうね」

「そんなことはないだろう。からだは丈夫な方だから」(冬の)

5. WH疑問型「ダロウネ」

さて、これまでにまだ取り上げていないタイプの「ダロウネ」として、WH疑問文に現れた「ダロウネ」がある。

(62) いつになったら、景気がよくなるんだろうね。

こうした「ダロウネ」は、疑問文を構成するという点で確認系「ダロウネ」と共通するので、両者の関係についての検討が必要になる。つまり、この「ダロウネ」を確認系「ダロウネ」と同一視できるかどうかという議論である。このタイプの「ダロウネ」を明示的に扱っているわけではないが、この点について、井上(1990:33)では、疑念確認の「ダロウネ」(本稿の確認系「ダロウネ」)は、「カ」に近い性質を持つことから、WH疑問文に生起できるとしている。

まず、このタイプの「ダロウネ」が推量系でないことは、

(62') *いつになったら、たぶん景気がよくなるんだろうね。

のように、「タブン」等の副詞と共起しないことから明らかであるが、では、この「ダロウネ」は確認系かと言うと、そうとも考えにくい。そもそも、疑問語は、確認系「ダロウネ」とは共起できないからである。

(63) まさか、あのことを{彼/*誰}に言ったんじゃないだろうね。

これは、未確定部分を含む命題は確認の対象とならないという、確認要求表現一般に認められる制約である。

(64) さては、あのことを{彼/*誰}に言った{んじゃないか?/だろう。/ね?}

本稿では、(62)のような「ダロウネ」は、「ダロウカ」によって表される話し手の疑念を「ネ」によって聞き手に持ち掛けたものと捉えたい。つまり、(62)は、

(62'') いつになったら、景気がよくなるんだろうか。

のような、「ダロウカ」の文に「ネ」を付加したものに相当すると考えるわけである。実際、(62')には、次のように、直接「ネ」を付加することができるし、その場合の意味も、(62)と特に変わらない。

(62'') いつになったら、景気がよくなるんだろうかね。

だとすると、(62)の「ダロウネ」は、(62'')の「ダロウカネ」から「カ」が落ちたものであるということになるが、これは、WH疑問文に見られる一般的な現象である。「ダロウ」の文においては、Yes-No 疑問文では、文末の「カ」が唯一の疑問要素であるため、必須の要素となるが¹⁵、WH疑問文では、疑問語が疑問文の目印となるため、文末の「カ」は任意の要素となる。

(65) 彼は来るだろう {か/# ϕ }。 (Yes-No 疑問文)

(66) 彼は何時に来るだろう {か/ ϕ }。 (WH疑問文)

(62'')の「ダロウカネ」の「カ」が落ちるのも、これがWH疑問文であるからであり、Yes-No疑問文では、「カ」を無条件で落とすことはできない¹⁶。

(67) そろそろ景気はよくなるんだろう {か/# ϕ } ね。

「ダロウカ」にも、問い掛け用法があることから、このタイプの「ダロウネ」との違いが問題になる。例えば、

(68) 「尾島さんはどういうつもりでしょうね？」

「分からないけど、尾島のことだもの、ろくなことは考えてないわよ」

純子はそう言って、「うちの社長は人を信じやすい性格だから」

と心配そうに付け加えた。(女社)

のような例は、「ダロウカ」と置き換えることが可能であるが、「ダロウネ」は、「ネ」を含むことにより、問題の共有化を促すニュアンスが「ダロウカ」に比べて強く出ているようである。逆に、「ダロウカ」は、「ダロウネ」に比べれば、より情報要求性が強く、そのことが次のような違いとなって現れる。

(69) A：なぜでしょうね。

B：ええ、なぜでしょうね。

(70) A：なぜでしょうか。

B：?? ええ、なぜでしょうか。

すなわち、(69) は、問題の共有化に止まることができているが、(70) は、相互に問い掛けることになってしまうため、不自然となる¹⁷。

なお、WH疑問文において「ダロウカ」と「ダロウネ」が（ニュアンスの違いはともかくとして）置き換え可能なのは、(68) のように、聞き手に知識があることを前提とせずに問い掛ける用法においてであり、

(71) 今年はどんな年になるだろうか……。 (自問)

(72) どちらにお住まいでしょうか。 (待遇的な質問)

(73) さて、正解は何番でしょうか。 (クイズ質問)

のような用法の「ダロウカ」は、まったく「ダロウネ」に置き換えられない。これは、「ネ」が聞き手に認識状態の共有化を提案するというような意味を持ち、それがこれらの文の機能と噛み合わないからであろう。

いずれにしても、WH疑問型「ダロウネ」の文は、「ダロウカ」によって表される話し手の懸念を聞き手に持ち掛ける文であり（つまり、実質的には「ダロウカ」の文であり）、本稿で中心的に取り上げた、確認系「ダロウネ」とは、直接関係のないものである。

6. おわりに

以上、本稿では、「ダロウネ」という形式の意味・機能と用法について、包括的な分析・記述を試みた。「ダロウネ」が文法的意味の点から推量系と確認系に分かれるとする見解は、既に、井上(1990)に見られ、その点では、本稿は、井上と同じ立場にあるが、井上の議論の焦点が、懸念確認の「(ノデハ) ナイダロウネ」が誘導否定疑問文の「(ノデハ) ナイカ」と平行的に複合モダリティ表現を構成しているといふことの証明にあるのに対し¹⁸、本稿では、確認系「ダロウネ」自体の確認要求表現としての特性についての検討を踏まえて、そこから、懸念確認の用法が派生するメカ

ニズムを意味と構造の両面において説明した。

本稿で議論できなかったこととしては、まず何よりも、確認系「ダロウネ」がなぜここで指摘したような意味・機能を有するのか、ということがある。これについては、確認要求の「ダロウ」と「ネ」の意味・機能の相互作用と見るほかないが、「ダロウ」と「ネ」のそれぞれについて議論する余裕がない以上¹⁹、残念ながら、ここで断定的な見解を述べることはできない。ただ見通しとしては、当該情報について、聞き手がそう認識していることを確認し（「ダロウ」の機能）、同時に、それが話し手と聞き手の共通認識となりうることも確認する（「ネ」の機能）、というように、当該情報を二重に確認するところから、その成立の必要性を話し手が強く意識している場合に用いられることになったと考えられるのではないだろうか。このような問題の検討は、同じく複合的な確認要求表現である「ヨネ」についても行う必要があろう。

また、確認系「ダロウネ」の特質を、日本語の確認要求表現の体系の中で把握するという、より大きな課題が残されているが、少なくとも、従来言われている、確認要求表現の疑問表現としての特徴は判断成立への傾き（bias）を有することにある、ということの内実について、より詳細に検討しなおす必要があるということは、本稿においても、十分に示しえたのではないかと思う。

注

- 1 本稿では、「ダロウネ」及びその丁寧体「デショウネ」を対象とし、両者をまとめて「ダロウネ」と呼ぶ。また、今回の事例データは、文字資料から採集したものであるので、「ダロウネ」となっているが、実際には「ダロウネエ」と発音した方が自然なものもあるが、この点については、特に問題にしないことにし、作例については、はっきりと上昇調イントネーションを持つものだけに文末に「？」マークを付した。なお、文体的変種として「ダロウナ（ア）」があるが、聞き手の存在を前提としないといった差異もあるので、ここでは、議論の対象を「ダロウネ」に限定することにする。
- 2 「伺い型の確認」とは、「話し手にとって確実扱いができない内容であると同時に、聞き手は確実扱いできる（と話し手が予想する）内容である」場合で、「押し付け型の確認」とは、「話し手がその内容を確実なこととして把握しているにも拘わらず、確認可能なはずの聞き手がまだ共通理解に達していない」という場合である（森山（1992：75-76））。
- 3 中野（1996）は、「ネ」が後接するのは、伺い型の確認（中野の分類ではⅠ型）の「ダロウ」であるという、森山（1992）と同様の見解を示している。また、中野は、確認要求の「ダロウ」「ダロウネ」の文を「確認要求の平叙文」と呼び、「ダロウネ」の「ネ」は必須でなく、話し手の確信度の高低を表し分ける任意の要素である、と考えている。
- 4 ただし、「キット」が「必ず」といった意味で用いられる場合は、この限りではない（「今度はきっと時間通りに来てくれるだろうね。」）。
- 5 ただし、「想定外」を表す副詞との共起テストは、否定文の場合にのみ、前置きの表現との共起テストは始発文の場合にのみ適用できる。また、ここでテストに用いることのできる「本当ニ」「タシカニ」は、発話の信憑性を問題にする文副詞であって、「現実ニ」「確実に」といった意味の命題副詞的な用法は含まない。
- 6 なお、（17）の応答として、「ええ、暑くなりますよ、きっと。」のように、確信的な推量の意味

- で断定形を用いることは可能である。ただし、その場合でも、「ヨ」がなければやや不自然になるだろう。
- 7 もっとも、典型的な質問文でさえも、実質的に判断の要求として働くことがないわけではない。「景気はいつ頃よくなりますか？」といった専門家への質問は、そのようなものと捉えられるだろう。
- 8 もちろん、「ダロウ」や「ネ」が価値判断を含んだ形での確認に使用できないというわけではない。例えば、「もちろん、君も行く {だろう／ね}？」のような確認には、「当然、聞き手も行くべきだ」というような話し手なりの価値判断が含まれていると言えよう。しかし、それは、「ダロウ」や「ネ」の使用にとって本質的なことではなく、そういう使われ方もあるというにすぎない。つまり、それは「ダロウ」や「ネ」自体の意味ではない。ここで重要なことは、確認系「ダロウネ」の使用には、価値判断と真偽判断のギャップの存在が不可欠であり、逆に、確認系「ダロウネ」を使用すれば、必ずそのことが意味されるということである。
- 9 こうした用法の成立に「ノダ」が関与しているとは言え、「ノダ」を用いればいつもこの用法になるというわけではもちろんない。
- 10 今回調査した「ナイダロウネ」「ノデハナイダロウネ」の実例の約半数が「マサカ」を伴っていた。
- 11 (46) のような例で、肯定応答詞と否定応答詞のいずれを用いる傾向があるかは、話者あるいは状況によって違うようである。井上(1990)でも応答の仕方が注目されているが、例文では、まず否定応答詞で答えており(「まさか私のことを忘れてないでしょうね。」「いや、忘れてなんかいないよ。」)、その後、「マサカ」の意味が弱まった場合には肯定応答詞もそれほど不自然でなくなると付け加えている。筆者自身は、中立的には肯定応答詞の方が出やすく、相手の懸念が強いと察知される場合には否定応答詞が出やすいように思われる。いずれにしろ、ここでは、応答の仕方に揺れがあるという事実を確認できれば十分である。また、井上は、こうした応答詞の選択の他、否定対極表現が共起しない(「?まさか誰にも見られなかっただろうね。」)ことを基に、「マサカ」と共起した「ナイダロウネ」が複合モダリティ表現を構成していると見ているが、否定対極表現についても、「まさかあのことは誰にもしゃべってないだろうね。」のようにまったく自然な例もあり、やはり揺れがあるようである。さらに、編集委員会より、(43)の文法性の不安定さについて指摘があったが、これも同種の現象である可能性が強い。よって、ここでは、積極的に「ナイダロウネ」全体を複合モダリティ表現と認定することはしないことにする。なお、「ノデハナイダロウネ」については、井上の主張通り、複合モダリティ表現と認めうる。
- 12 ここから、「ノデハナイダロウネ」と複合辞「ノデハナイカ」(田野村(1990)の「デハナイカ」第2類)の関係が問題になろう。つまり、「ノデハナイダロウネ」は、「ノデハナイカ」を当為確認化したものではないかということである。「モシカシテ」と共起するという点では、確かに、両者に共通性が認められるが(「もしかして、何か隠しているんじゃない {か／だろうね} ?」)、そもそも、「ノデハナイカ」は、確認要求化できないという重大な反証がある(「君、疲れているんじゃない {か／*だろう／*ね} ?」)。「モシカシテ」との共起については、「ダロウネ」の意味の二面性から十分説明できるので、ここでは、「ノデハナイダロウネ」の「ノデハナイ」は、命題として表面化する側面を当為性から懸念される可能性へと反転させる働きをするものと捉え、積極的に「ノデハナイカ」と関係づけることはしないことにする。
- 13 「本当に、このいたずらは君がやったんじゃない(ん) だろうね？」のような例では、懸念確認ではなく、当為確認に「ノデハナイダロウネ」が用いられているように見える。しかし、これは、

- 「君」を否定の焦点にする「ノデハナイ」に「ダロウネ」が付いたものであり（したがって、「本当に、このいたずらをやったのは君ではない（ん）だろうね？」という名詞述語文に変換できる）、ここで言う「ノデハナイダロウネ」には該当しない。
- 14 動詞述語文でも、「本当に、嘘ついてないんだろうね？」のような場合には、「ノ」が挿入できる。これは、「本当に」という副詞によって、命題が既定化されるからである。「ダロウネ」の文と「ノダ」の関係については、やや問題が複雑なので、これ以上は扱わないこととする。
- 15 (65) は、「カ」を落とすと、確認要求の意味になる。逆に、確認要求の「ダロウ」に「カ」を付加することはできず、要するに、「カ」の有無が、疑念表出と確認要求といった疑問文としての機能の違いを表し分けているということもできる。
- 16 (67) は、「カ」を落とすと、話し手の疑念を持ち掛ける文であることを維持できず、確認系の「ダロウネ」になってしまう。
- 17 ただし、(70) B は、「さあ、なぜでしょうか。」という形でなら、受け答えできる。これは、「サア」自体が回答不能という一種の応答的態度を示すからだと思われる。
- 18 なお、井上は、論文の最後に、「[...] ナイ + X (X は任意の文法形式) のような構造、すなわち否定辞が否定命題を構成せずに、後続の要素と複合してモダリティ表現を構成する背景には、(中略)「疑念」のようなより一般的な要因が関与している」(井上(1990: 33-34)) という意味論的な一般化の見通しを示している。
- 19 「ダロウ」についての筆者の見解は、宮崎(1993)、同(1996a)を参照されたい。

用例の出典

赤川次郎「女社長に乾杯!」、大江健三郎「死者の奢り」、北杜夫「楡家の人々」、司馬遼太郎「国盗り物語」、曾野綾子「太郎物語 大学編」、立原正秋「冬の旅」、新田次郎「孤高の人」(以上、すべて新潮文庫による。)

参考文献

- 安達 太郎 (1991) 「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『日本学報』10, pp.45-60, 大阪大学文学部日本学研究室
- 井上 優 (1990) 「「ダロウネ」否定疑問文について」『日本語学』9-12, pp.28-35, 明治書院
- 奥田 靖雄 (1984) 「おしはかり (一)」『日本語学』3-12, pp.54-69, 明治書院
- 金水 敏 (1992) 「談話管理理論からみた「だろう」」『神戸大学文学部紀要』19, pp.41-59
- 田野村 忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 鄭 相哲 (1992) 「いわゆる確認要求の「ネ」と「ダロウ」—情報伝達論的な観点から—」『日本学報』11, pp.27-39, 大阪大学文学部日本学研究室
- 中野 伸彦 (1996) 「確認要求の平叙文と終助辞「ね」—江戸語と現代語—」『山口明徳教授還暦記念国語学論集』, pp.485-500, 明治書院
- 仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 蓮沼 昭子 (1995) 「対話における確認行為 「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」『複文の研究 (下)』pp.389-419, くろしお出版
- 三宅 知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89, pp.111-122, 日本語教育学会
- 宮崎 和人 (1993) 「「～ダロウ」の談話機能について」『国語学』175, pp.左40-53, 国語学会

宮崎 和人 (1996a) 「確認要求表現と談話構造―「～ダロウ」と「～ジャナイカ」の比較―」『岡山大学文学部紀要』25, pp.107-120, 岡山大学文学部

宮崎 和人 (1996b) 「「～ダロウネ」の意味・機能をめぐって」第9回日本語文法談話会レジュメ

森山 卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』pp.57-120, くろしお出版

森山 卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101, pp.64-83, 日本言語学会

付 記

本稿は、第9回日本語文法談話会（1996年12月8日，神戸大学）での研究発表を論文にしたものである。発表の席上やその他の機会に貴重なご助言を下された方々に記して感謝申し上げます。また，投稿後，査読者及び編集委員会，井上優氏からのご指摘やコメントによって，いくつかの点で記述を改善できた。合わせて，感謝申し上げたい。

（投稿受理日：1999年6月21日）

宮崎 和人（みやざき かずひと）

岡山大学文学部

700-8530 岡山市津島中三丁目1番1号

Expressions seeking confirmation with sentence-final form *daroo-ne*

MIYAZAKI Kazuhito

Okayama University

Keywords

conjecture, seeking confirmation, compound modal form, *daroo-ne*, (no) *dewa-nai-daroo-ne*

Abstract

In this paper, I attempt to give a full description of the meanings and functions of sentences with the sentence-final form *daroo-ne* in Japanese. The forms *daroo-ne* are divided into two types; one which holds the meaning of the conjecture form *daroo*, and the other which results from the combination of *daroo* and *ne* as an independent modal form used to seek confirmation of the propositional content on the basis of the speaker's judgment of necessity. Co-occurrence with adverbs which indicate a degree of certainty distinguishes the former from the latter. The discourse functions of the conjecture type *daroo-ne* depend on the functions of *ne*. Its interrogative function derives not from its grammatical feature, but its pragmatic function in dialogue. By contrast, confirmation seeking *daroo-ne* is interrogative in itself. It implies that the speaker thinks that the propositional content should be true, but it might in fact not be true. Especially in the case of the negative sentence *P-nai-daroo-ne* with the modal adverb *masaka*, it implies that the speaker thinks that *P* should not be true. On the other hand, *no-dewa-nai-daroo-ne* is an independent modal expression seeking confirmation, which is used when the speaker is apprehensive that the propositional content might be true.

Finally, in addition to the two types above, there is another type of *daroo-ne*, which is used in *wh*-questions. It is regarded as the shortening of the dubitative form *daroo-ka-ne*.